

おじいさん、勇気をくれてありがとう

中央小学校 五年 荒川 未帆

「あれ。あのおじいさん、何しているのかな

し。

夏休み夕方の夕方、お母さんとニコアに買物に行った時のことでした。私達が入口から入っていくと、車いすに乗ったおじいさんが、私達の方に向かっでやっできました。そのおじいさんは、車いすのハンドルを回しては、カー

トを押して、また車いすを動かしては、カー

トを押すをくり返しています。まるで車いすとカートが競争しているようでした。ゆっくりゆっくり進みながらも、一生けんめいにこいでいます。おじいさんは、買い物した荷物をひざの上に置き、両手でハンドルをにぎって、ぐくと回して進み、今度はカートを手で引いて、カート置場の方に進んでいます。何度もくり返しながら。

「そうかあ、自分の使ったカートを持っていくようにしてるのかあ。でも、大変そうだな

あ。汗をいっはいかいて……。でも、かん
はっているんだなあ。

と、私はおじいさんの苦しい表情を見て思
いました。

おじいさんとすれちがった人も、近くに
いる人も、見て見ぬふりをしています。

「どうして、助けてあげないんだろう。どう
して、気づかぬふりをするんだろう。どう
して、無視するの。」

私の心中の「どうして」が、ぐるぐる頭の中
で回っています。

「未帆が助けてあげなよ。」
「知らんぷりすれはいいんだよ。みんなもそ
うしているんだし。」

二つの正反対の意見が、頭の中で言い争いを
しています。

「確かにみんなも知らんぷりをしているけれ
ど……。やっぱり知らんぷりなんかできな
い。そうだ。私が手伝ってあげれば、困っ
ているおじいさんを助けてあげられる。」

そう思っ、たとたん、おじいさんが私の方に、もつと近づいてくるのがわかりました。おじいさんが、私のそばを通って行きます。近づくとつれて、心の中のドキドキも大きくなつてきました。

ドキドキ……おじいさんがこっちに来る。

ドキドキ……一言、言わなきゃ。

ドキドキ……おじいさん、苦しそう。

ドキドキ……助けてほしいと思っ、ているんじゃないかな。

想像以上のドキドキでした。マラソンでゴールした時だっ、て、こんなにドキドキしませんでした。おじいさんと目が合いました。

「……何か、お手伝い、しますか。」

ドキドキしなからも、私は勇気を出して言いました。その時のおじいさんの顔。ホッとしたりよくな、うれしそうな笑顔で、こっちまでうれしくなりました。おじいさんが押していた、カートをあずかり、カート置き場に置いてきた私に、おじいさんは、

「助かりました。ありがとう。ありがとう。障害のせいか、あまりよく聞きとれませんでしたか、何度もお礼を言っ、頭を下げるおじいさんでした。

「困っている時は、おたがいさまですよ。」と、そはに立っていたお母さんが言いました。それでも、何度も頭を下げながら、おじいさんは、車いすを押ししてニコアを出て行きました。

おじいさんを見送ってから、

「ちょっとした親切でも、その人にとっては、とってもうれしいことだったんだよ。やって良かったね。」

お母さんか、「こりして言いました。」

車いすのおじいさんを見て、三年生の時のことを思い出しました。子ども会の奉仕活動で、白梅荘に出かけた時のことです。体の不自由な人が使っている車いすには、飲み物をこぼした後や、その所に食べかすがつまっています。それを、一台一台、ていねいにふ

いてきれいにしてあげました。きれいになっ
た車いすにすわったおはあさんは、
「あいやあ。きれいになったこと。どうもあ
りがとう。」
と、にこにこしていました。

あの時、車いすをきれいにしてあげたから
私の頭の中に「車いす」が残っていたのでし
よう。だから、車いすを見て、おじいさんを
見て、困っていることが分かったのだと思い
ます。

私の心の中に「勇気」が強くあつたから、
一言が言えたのです。私のその一言でおじい
さんを助けられて本当によかつたです。私も
おじいさんから、「勇気」という大切なもの
をもらいました。

「これが、お母さんの言っていた言葉の意味
なんだ。」

ドキドキしていた私の心の中に、「勇気」
という言葉が、スウーッと風のように入っ
てきた出来事でした。